

正林先生の喜寿記念献呈論文集発刊にあたって

熊本大学の甲元先生から正林護先生の喜寿記念の論文集を出したらどうかのご意見を頂いたのは2004年の春頃であったと思う。当時小生は壱岐の原の辻遺跡調査事務所に勤務しており、比較的時間の余裕があったため一も二も無く賛同し、長崎に帰った折、早速西海考古編集者の古門氏と渡邊氏にその旨を伝えた。古門・渡辺両氏もその趣旨に賛同し、数名の会員と図って正林先生の誕生日である7月を目途に刊行すべく準備に入ったのであるが、執筆者諸氏も多忙で原稿がなかなか集まらなかった。

小生も執筆者の1人であったが、人事異動や怠惰な性格も災いして執筆が中断されたままになってしまった。その点この文を書く資格はない。

個人的には正林先生とは1970年以来お付き合いを願っているが、これまで旧文化課での仕事を始めとして、今日にいたるまで公私にわたって様々な点で指導を賜わっている。一緒に関わった発掘調査も1973年以来里田原遺跡、原山支石墓群、塔の首遺跡など多岐にわたり、思い出も深い。中でも、休日もなく胸まである雨合羽を着て連日雨中での発掘を余儀なくされた里田原遺跡の緊急調査は特に印象が深い。歩いて宿に戻り、疲れた身体に壱岐焼酎「山の守」が合うのを覚えたのもこの遺跡であった。勿論ご指導頂いたのは正林先生である。

先生におかれては喜寿を過ぎてなお、学問的興味が尽きることなく己が道を邁進されておられる。また歴史が好きな市民を対象とし、ご自身で主催されている「古代探訪」も10年目を迎えたとも言われる。会員の積極性もあり、その活発な活動範囲は県外まで及んでいるが、その好奇心を支えているのはやはり正林先生の指導力であろう。

先生の胃袋の強靱さにも驚くべきものがあるが、その精力的な生き方には全く脱帽せざるを得ない。自分が同じような年齢になったとき、果たしてこれほどの好奇心を持ち続けていられるのか全くもって心許ない。そうありがたいとは勿論思うが。

献呈論文集に、このような思い出文でお茶を濁すのは誠に心苦しい限りであるが、この責は遠くない時期に果たしたいと思っており今回はご寛恕頂きたい。

最後に正林先生におかれましては、くれぐれも御自愛の上、またいつまでも現役にこだわりながら後進の指導に当たっていただくよう切にお願い申し上げます。

2005年7月

長崎県学芸文化課 高野晋司